

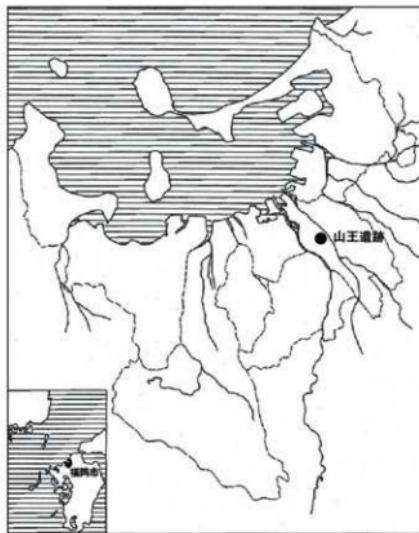
さん　　のう　　い　　せき
山 王 遺 跡 9

—山王遺跡第11次調査報告—

2019
福岡市教育委員会

S A N N O U I S E K I
山王遺跡 9

—山王遺跡第11次調査報告—



遺跡略号 SNN-11
調査番号 1713

2019
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財を残してきました。しかし開発工事の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、数十年にわたって努力を重ねて参りました。

本書は社屋改築に伴い、博多区山王2丁目地内で実施した山王遺跡第11次調査の成果を収めたものです。今回の調査では、弥生時代後期の堅穴建物、土坑、柱穴、溝、中世の井戸が確認され、集落の移り変わりが明らかになりました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、株式会社翔薬様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げる次第です。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子明夫

例 言

1. 本書は社屋改築に伴い、福岡市博多区山王2丁目30-1、30-2地内において実施した山王遺跡第11次調査の報告である。
2. 検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット SP 堅穴建物 SC 溝 SD 土坑 SK
3. 遺構・遺物の実測・写真撮影は木下博文、製図は山崎賀代子が行った。
4. 金属製品および玉類の保存処理・科学分析は福岡市埋蔵文化財センター 比佐陽一郎・松園菜穂が行った。
5. 本書で使用した方位は磁北で、真北より $6^{\circ}20'$ 西偏する。
6. 中国陶磁器の分類は、以下の文献によった。
太宰府市教育委員会「太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-」太宰府の文化財第49集 2000
7. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
8. 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号 1713	遺跡略号 SNN-11	分布地図番号 37 東光寺
所在地 博多区山王2丁目30-1、30-2		調査面積 287m ²
調査期間 2017.7.11 ~ 9.21		

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の記録	5
1 調査の概要	5
2 遺構と遺物	5
竪穴建物	
土坑	
井戸	
3 まとめ	13
山王遺跡11次調査出土玉類の保存科学的調査	14
図版1～8	

挿図目次

図1 遺跡の位置 (S = 1/25000)	2
図2 周辺調査地点位置図 (S = 1/3000)	3
図3 調査地点位置図 (S = 1/1000)	3
図4 調査区平面図 (S = 1/300)	4
図5 SC01・02・06・08実測図 (S = 1/80)	6
図6 SC02・08出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2)	7
図7 SC15・16・17および出土遺物実測図 (S = 1/80、1/3、1/2)	8
図8 SK05および出土遺物実測図 (S = 1/40、1/2)	9
図9 SK14出土遺物実測図 (S = 1/2)	9
図10 SE18実測図 (S = 1/80)	10
図11 SE18出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2)	11
図12 SP出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2)	12

図版目次

図版1 1区東半全景(南東から) SC01(南西から) SC02(南西から) SP06壺出土状況(南から) SC02壺出土状況(北から)	
図版2 1区西半全景(北東から) SC06(東から) SC08(北から)	
図版3 SK05(北西から) SK05勾玉出土状況(南西から) SK05勾玉出土状況拡大	
図版4 2区全景(南西から) SC08(東から) SK14(南から)	
図版5 SC15(東から) SP121壺出土状況(北から) SC16(西から) SC17(東から) SE18(東から)	
図版6 出土遺物1	
図版7 出土遺物2	
図版8 出土遺物3	

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、平成 28（2016）年 6 月 22 日付で、株式会社 翔葉より博多区山王 2 丁目 30-1、30-2 地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号 28-2-240）。申請地は山王遺跡の範囲内であることから、協議の上、同年 8 月 10 日に試掘調査を実施し、現地表面下 80～115 cm で遺構を確認した。この結果を受けて遺跡の保存について協議したが、今回は本社ビル改築で、その基礎工事内容は埋蔵文化財への影響を避けられないことから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、平成 29（2017）年 7 月 11 日にバックホウによる表土剥ぎより着手した。7 月 13 日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、平成 29（2017）年 9 月 21 日に終了した。

なお調査範囲は基礎工事が行われる建築物の範囲であり、それ以外については現状保存されている。

2 調査体制

調査委託 株式会社 翔葉

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査 平成 29 年度 資料整理 平成 30 年度）

調査総括 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課長 常松幹雄（平成 29 年度）

経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長 大庭康時（平成 30 年度）

同課調査第 1 係長 吉武学（平成 29・30 年度）

庶務 文化財保護課管理調整係 松尾智仁（平成 29 年度）

文化財活用課管理調整係 松尾智仁（平成 30 年度）

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係長 本田浩二郎（平成 29・30 年度）

同課事前審査係主任文化財主事 池田祐司（平成 29 年度）

同課事前審査係 田上勇一郎（平成 30 年度）

吉田大輔（平成 29・30 年度）

調査担当 埋蔵文化財課調査第 1 係 木下博文

第2章 遺跡の立地と環境

福岡平野の中央部、博多湾に向かって北西に流れる御笠川と那珂川に挟まれた地域には、阿蘇山火砕流堆積物起源の鳥栖ローム、八女粘土層を基盤とする台地が春日市須玖から博多市博多駅南地区にかけて延びている。この台地上には『後漢書』・『三国志』といった中国の史書に記載される奴国を中心と目されている須玖遺跡群、日本最古級の環濠集落で、縄文晩期にさかのぼる水田の検出で著名な板付遺跡、朝鮮半島の無文土器が出土した諸岡遺跡など、弥生時代を中心として対外交流や基層文化を考察する上で見過ごすことのできない重要遺跡が密集している（図 1）。

その遺跡群のうち、北西端に位置する比恵・那珂遺跡群では、道路・環溝住居・墳丘墓など弥生時代の遺構が集中し、古くより注目され、その整然とした様相は近年都市との評価もなされている。

また時代が下って古墳時代後期、春住小学校の南西側にあたる比恵8・72次調査では三本柱からなる柵列で取り囲まれた倉庫群が検出され、「日本書紀」に記載される那津官家の有力候補地として保存されている。

今回調査対象となる山王遺跡は、比恵遺跡群とは谷を挟んで東方に、那珂遺跡群の北方に隣接し、東側は御笠川と接する。以前は地表面採集資料により山王壇棺遺跡と呼称されたが、比恵壇棺遺跡と合わせて山王遺跡と呼称することとなり、現在に至っている。2019年3月現在、計15回の調査が実施されており、弥生から中世までの遺構・遺物が確認されている。3次調査では東西方向の溝・波板状遺構が検出されており、12世紀代の道路跡と報告されており、同時期の井戸から木製の独楽が出土している。4次調査では弥生時代前期の貯蔵穴、同後期～終末および古墳時代の堅穴住居、古墳時代初頭の井戸などを検出している。6次調査では副葬小壺を伴う木棺墓、壇棺墓からなる弥生時代前期後半の墓域、古代末期の土坑墓、中世初頭の井戸・溝を検出している。

今回の調査地点は遺跡の東端部中央に位置し、すぐ東側に御笠川が流れる標高6.2～6.5m程度の地点である(図2)。6次調査地点とは道路を挟んで南東側に位置する。

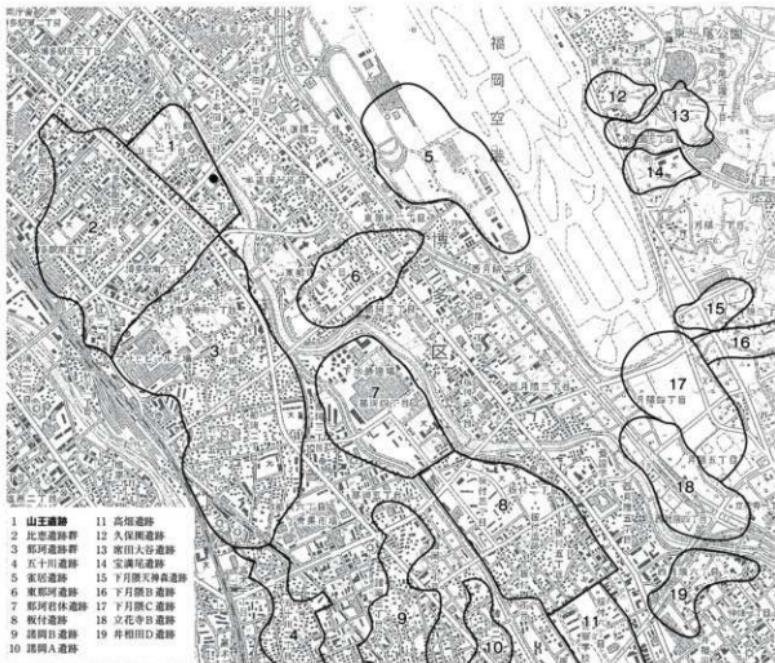


図1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)

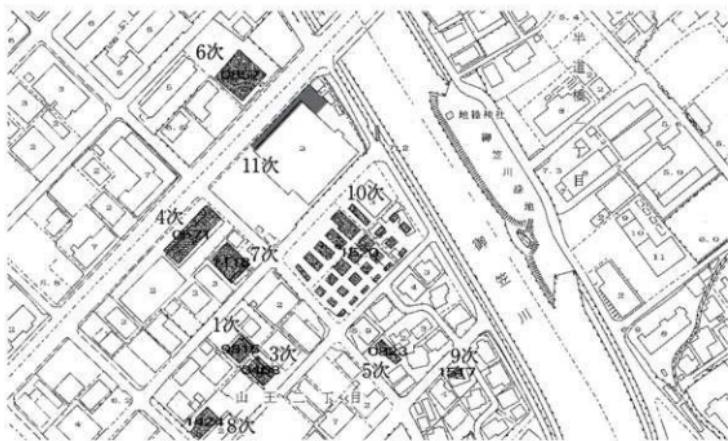


図2 調査地点位置図 ($S = 1 / 3000$)

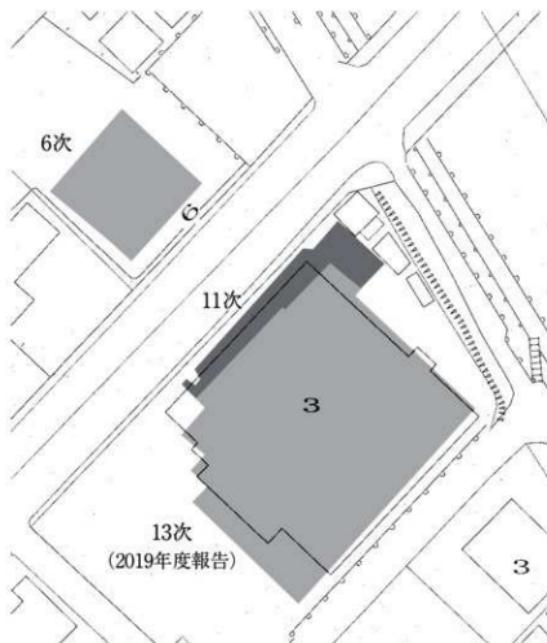
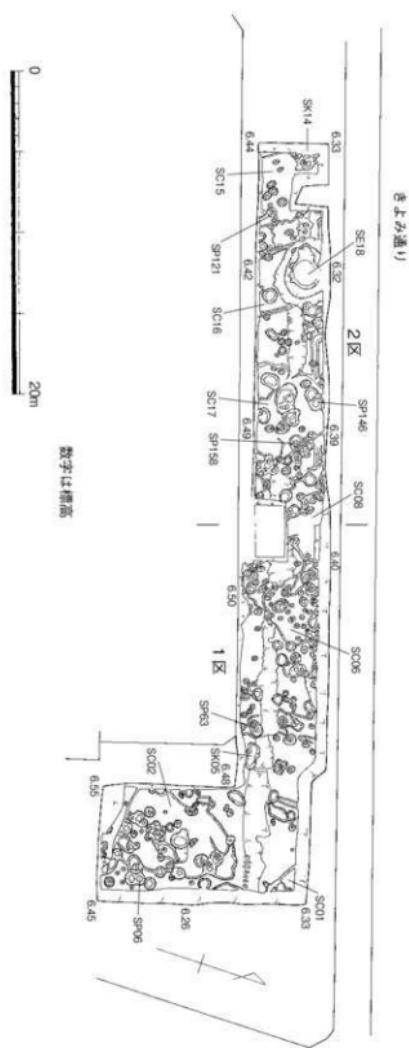


図3 調査区配置図 ($S = 1 / 1000$)



[図4] 調査区平面図 (S = 1 / 300)

第3章 調査の記録

1 調査の概要

調査対象地は、現況で標高6.4～6.6mを測り、遺構面までの土層堆積は①アスファルト・パラス・真砂土（地表面下72cmまで）、②旧水田耕作土（地表面下84cmまで）、③旧水田床土（遺構検出面まで）である。

調査は排土処理の関係から2回に分け、東半から開始した。東半を1区、西半を2区とした。

遺構は地表面下90～120cmの鳥栖ローム層上面で検出した。弥生時代後期の竪穴建物・土坑・溝、鎌倉時代前期の井戸1、ピット180余りである。遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

出土遺物量はコンテナ20箱分である。内容は竪穴建物から弥生土器、金属器（青銅製鋤先）、石製品（穂摘具の未完成品、打製鎌、砥石など）、土製品（紡錘車、投弾）、井戸から中国産陶磁器（一部墨書きあり）、木製品が出土している。他に黒曜石剥片が出土している。また特筆すべきものとして勾玉・ガラス玉が出土しており、科学分析の結果興味深い事が判明した。その内容は本文末に掲載している。

2 遺構と遺物

竪穴建物

SC01（図5、図版1）

1区北隅で検出した。深さ0.3mである。

SC02（図5、図版1）

1区中央で検出した。方形の隅部が認められ、2ないし3棟が切り合っているものとみられる。しかし掘り下げ時には切り合いを明確に判別できなかった。

出土遺物（図6、図版6）

1～3は弥生土器である。1は壺である。底径5.0cm、残存高6.5cm。外面は浅黄橙色、内面は灰褐色を呈し、頸部より上を欠いている。建物の隅部直近から出土した。2は鉢である。口径10.8cm、器高6.3cm、底径3.0cm。浅黄橙色を呈す。3は器台とみられる。残存高8.6cm、淡橙色を呈し、外面の頸部以下にハケ目を施す。4は土製紡錘車である。径3.6cm、厚さ1.5cm、径0.5cmの孔をあける。橙色を呈す。5は打製石鎌である。残存長1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmである。6は砥石である。縦4.0cm、横1.6cm、厚さ1.3cm、重さ14.0gである。7は青銅製鋤先である。縦5.6cm、横4.1cm、厚さ0.1cm、重さ24.5gである。

SC06（図5、図版2）

1区西端、SC08の東側で検出した。南北3.9m×東西4.3m以上の方形で、深さ0.2mである。

SC08（図5、図版2・4）

1区と2区にまたがって検出した。南北4.2m以上×東西4.6m以上の方形で、深0.2mである。

出土遺物（図6、図版6）

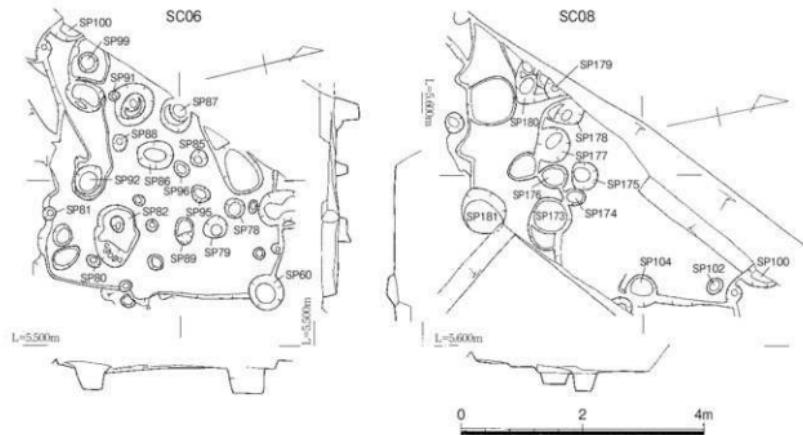
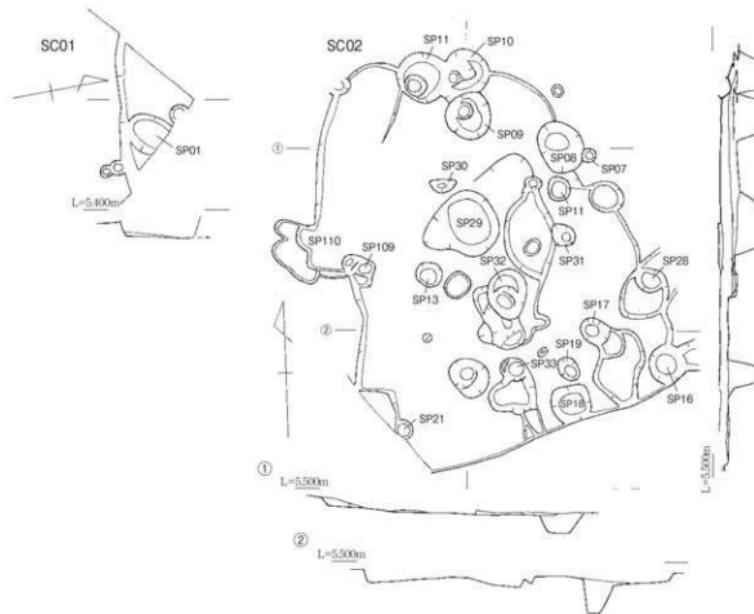


図5 S C O 1 · 0 2 · 0 6 · 0 8 実測図 (S = 1 / 80)

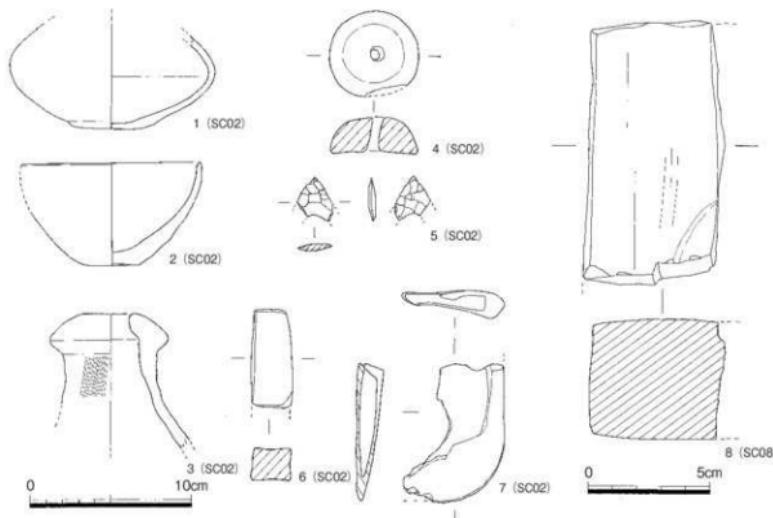


図6 SC02・08出土遺物実測図 (S = 1/3, 1/2)

8は砾石である。縦10.7cm、横5.6cm、厚さ4.9cm、重さ586.5g、線状痕と被熱による赤変が見られる。

SC15 (図7、図版5)

2区西端で検出した。南北4.2m×東西3m以上の方形で、深さ7cmである。

出土遺物 (図7、図版7)

9～12は弥生土器である。9はミニチュア土器の鉢で、復元底径5.0cm、残存高3.4cm、浅黃橙色を呈す。10～12は甕である。10は口縁部で残存高5.4cm、褐色を呈す。11は底部片で復元底径8.4cm、残存高3.5cm。外面は橙色、内面は灰白色を呈す。体部外面にハケ目を施す。12は復元口径22.2cm、残存高22.1cm。淡褐色を呈し、体部外面にハケ目を施す。

SC16 (図7、図版5)

2区、SC15の東側で検出した。SE18に切られる。南北3.7m×東西3m以上の方形で、深さ0.15mである。壁際に幅0.2m、深さ6cmの浅い溝を掘る。

出土遺物 (図7、図版7)

13は土製投弾である。残存長3.9cm、幅2.5cm、黒灰色を呈す。

SC17 (図7、図版5)

2区、SC16の東側で検出した。東西5.9m×南北3.8mの方形で、深さ0.1～0.2mである。

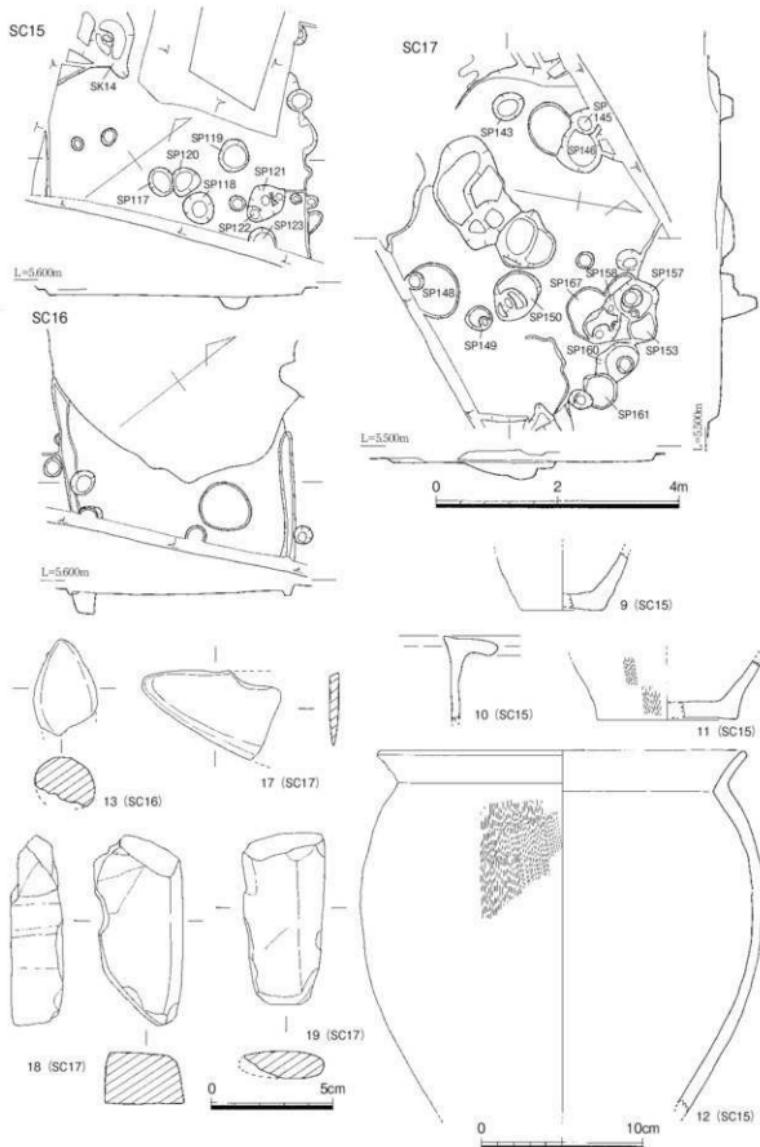


図7 S C 1 5 · 1 6 · 1 7 および出土遺物実測図 (S = 1 / 80, 1 / 3, 1 / 2)

出土遺物（図7、図版7）

14は石製鉗摘具である。残存長5.6 cm、幅3.6 cm、厚さ0.35 cmである。15は抉入片刃石斧である。綫7.8 cm、横3.6 cm、厚さ2.1 cm、重さ96.0 gである。16は用途不明石製品である。綫7.0 cm、横3.3 cm、厚さ1.1 cm、重さ38.0 gである。

土坑

SK05（図8、図版3）

1区で検出した。東西1.55×南北0.82 mの不整な長楕円形で、深さ0.3 mである。北壁際の底付近で勾玉1点、勾玉とはほぼ同一レベルで風化した白色ガラス玉が散発的に出土した。墓の可能性もあるが、平面プランが整っておらず、土坑とした。弥生時代後期に属す。

出土遺物（図8、図版7）

17は勾玉である。綫2.6 cm、横1.6 cm、厚さ0.7 cm、重さ3.9 g、孔径0.35 cmである。頭部に三本の筋彫りが施されており、いわゆる丁字頭形である。科学分析の結果、蛇紋岩製であることが判明した。18～31はガラス玉である。径0.7～0.8 cm、厚さ0.4～0.5 cm、孔径0.3～0.4 cmである。表面が白色、風化が進み非常に脆いが、破片の断面では本来の緑色が見られる。勾玉・ガラス玉の科学的分析結果について、本文末に別稿を掲載している（14～17ページ）。そちらを参照されたい。

SK14（図7、図版4）

2区西端、SC15の北西側で検出した。東西1.35 m、南北1.05 m、深さ0.36 mである。

出土遺物（図9、図版7）

32は土製紡錘車である。径3.8 cm、厚さ0.5 cm、浅黄橙色を呈す。

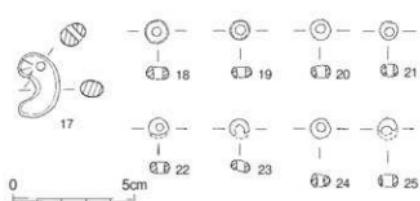
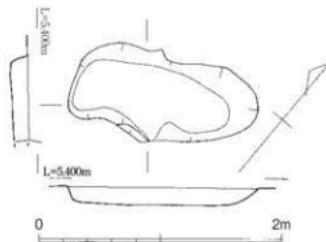


図8 SK05および出土遺物実測図
(S = 1/40, 1/2)



図9 SK14出土遺物実測図
(S = 1/2)

井戸

SE 18 (図 10、図版 5)

2 区西半で検出した。北側の端部は調査区外に伸びる。SC 16 を切る。径 4.3 m、深さ 3.2 m で、上半は鳥栖ローム層をすり鉢状に掘削し、白色の八女粘土層から径 1.75 m の円形に直下に掘り込む二段構造である。井戸側の痕跡はなかった。遺物は龍泉窯系鎬蓮弁文椀や白磁、須恵器、瓦器椀、木製品、滑石製品が出土している。平安時代末期～鎌倉時代前期に属す。

出土遺物 (図 11、図版 7・8)

33 は瓦器椀である。口径 16.6 cm、器高 5.5 cm、高台径 6.5 cm、内面および口縁部は灰色、その他は灰白色を呈す。34 は施釉陶器の椀である。口径 16.8 cm、器高 6.8 cm、高台径 5.6 cm、胎は赤褐色、釉は灰褐色を呈す。体部内面に縱方向の筋彫り、見込みに重ね焼きの目跡が 6ヶ所残る。35～37 は白磁である。35～37 は椀で、35 は太宰府分類の V-4 a 類、36 は IV-1 a 類、37 は V-4 b 類である。底部外面に花押のような墨書がある。38 は皿で、IV-1 a 類である。底部外面に花押のような墨書がある。39 は龍泉窯系鎬蓮弁文青磁椀で、小椀 II-b 類である。口径 12.4 cm、器高 5.0 cm、高台径 7.2 cm。40 は内黒の黒色土器椀である。高台径 6.7 cm、残存高 3.9 cm、外面は浅黄橙色、内面は炭素の吸着により灰黒色を呈す。体部と高台部の接合痕が残る。41 は用途不明木製品である。長さ 14.3 cm、幅 3.1 cm、厚さ 0.9～1.9 cm、ホゾ穴のような方形の割り込みがある。42～44 は滑石製品である。42 は白形の用途不明品である。縦 3.3 cm、横 3.8 cm、高さ 3.1 cm、重さ 30.0 g である。43 は棒状の用途不明品である。長さ 7.0 cm、幅 2.5 cm、厚さ 1.9 cm、重さ 55.0 g。割り込みがあり、紐などを緊縛したか。44 は白玉である。径 0.8 cm、厚さ 0.5 cm、穴径 0.25 cm。45 は土玉である。径 2.2 cm、灰褐色を呈す。

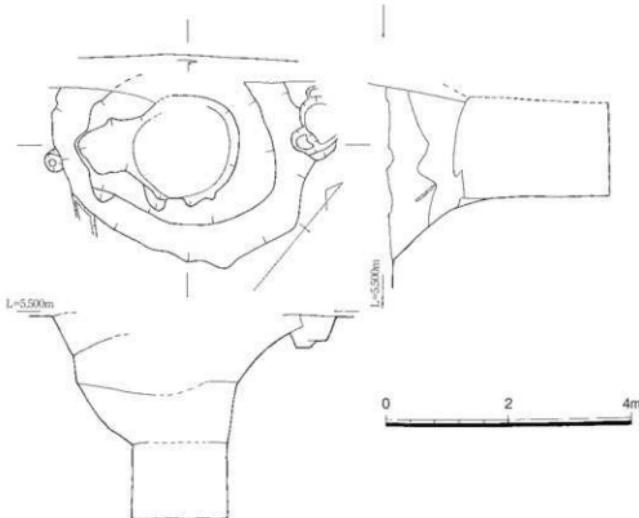


図 10 SE 18 実測図 (S = 1 / 80)

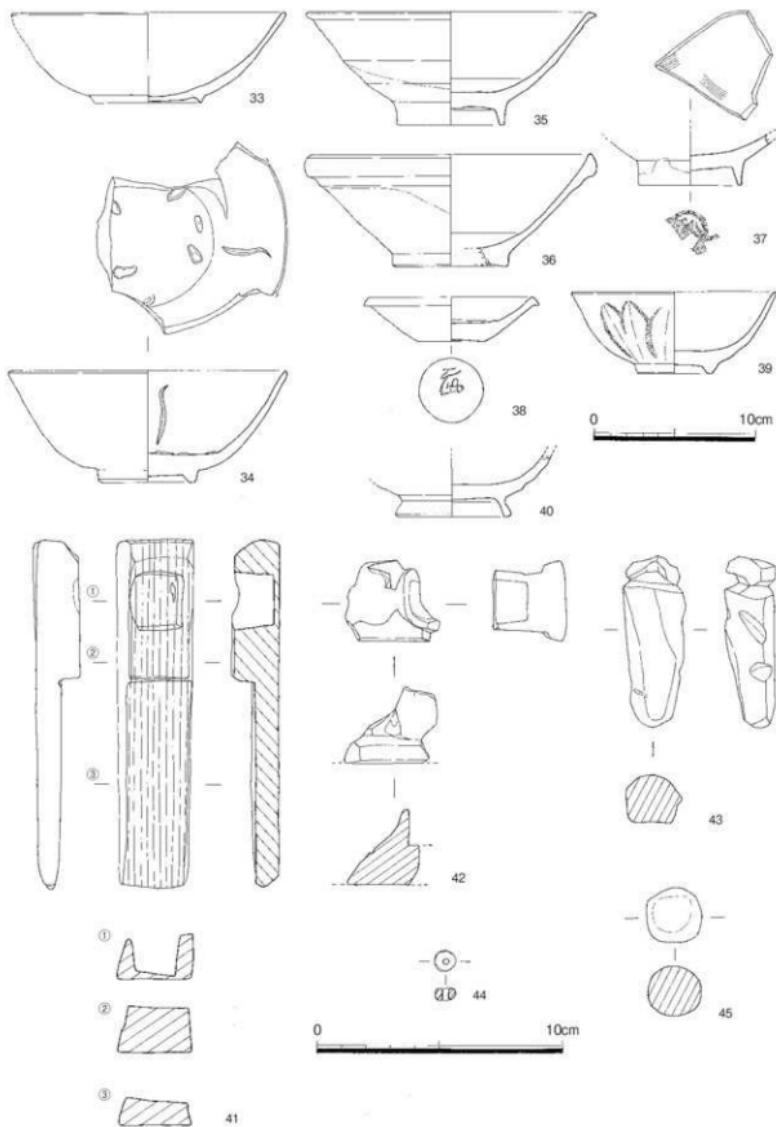


図11 SE 18出土遺物実測図 ($S = 1/3, 1/2$)

S P 出土遺物 (図 12、図版 8)

46は土玉である。径 2.2×18 cmで灰白色を呈す。2区S P 121出土。47は土製投弾である。長4.1 cm、幅2.5 cmで灰褐色を呈す。2区S P 158出土。48は石製槌揃具の未成品である。横15.5 cm、縦5.9 cm、厚さ0.5 cm、重さ99.5 gで、一ヶ所のみ穿孔を施し、刃部を研ぎだしていない。2区S P 146出土でS C 17に伴うものか。49は滑石製有孔円盤である。幅2.2 cm、厚さ0.4 cmである。1区S P 63出土。50は弥生土器の複合口縁壺である。復元口径20.0 cm、残存高29.2 cmで、浅黄橙色を呈す。調整は外面の胴部・頸部下半はハケ目、それ以外はなでである。1区S P 06出土。51は弥生土器の壺である。底径7.3 cm、残存高25.3 cmで浅黄橙色を呈す。外面に縦方向、内面の頸部と胴部の接合部分のすぐ下に横方向のハケ目を施す。2区S P 121出土でS C 15に伴うとみられる。

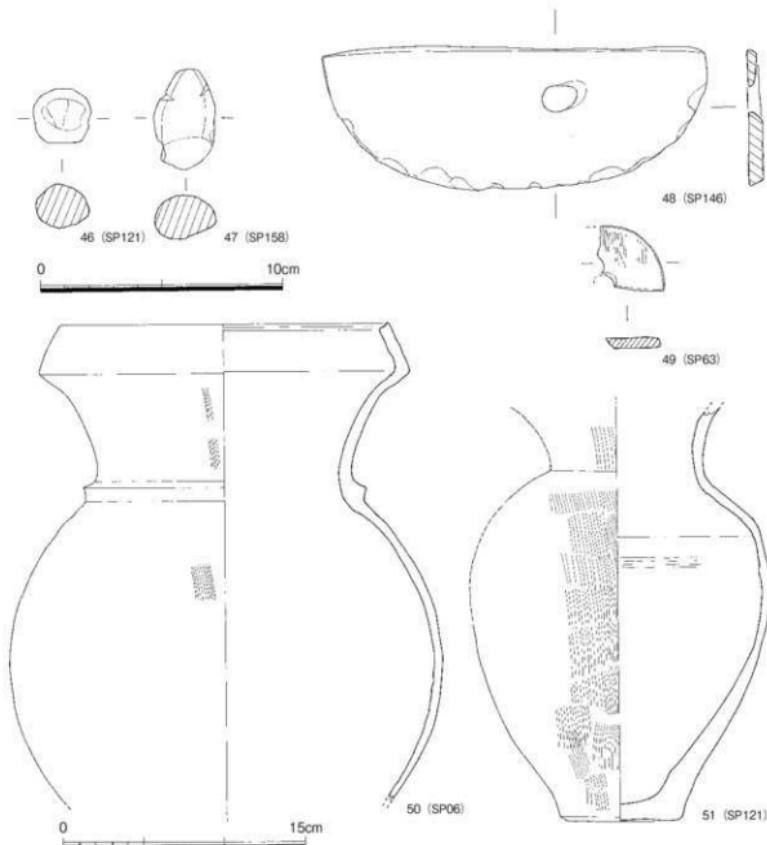


図 12 S P 出土遺物実測図 ($S = 1/3, 1/2$)

3　まとめ

今回の調査では、弥生時代および平安時代末期～鎌倉時代前半の遺構が確認された。時代ごとに要点をまとめ、今後の課題・問題点をあげておきたい。

まず弥生時代について、検出遺構の中心は方形の竪穴建物群である。遺物は中期から後期終末までの土器片が出土しているが、主となる時期は後期とみられる。今回の調査地の、きよみ通りを挟んだ北西側に位置する6次調査では、調査区の南東端で前期後半の木棺および甕棺からなる墓地が検出された。その墓域がどの範囲まで広がるのか、注目されるところであったが、今回の調査によって、きよみ通りを越えて南東側には広がらないことが明らかになった。今回の調査では前期の遺構・遺物は確認されず、時代の下った中期以降、竪穴建物が密集する集落地となっていることが明らかとなった。きよみ通り下の場所で、地形や遺構の内容においてどのような変化があるのか、関心が持たれるところである。

こうした集落地となっている場所で、特異な遺構とみられるのが、蛇紋岩製勾玉およびガラス玉が出土したSK05である。このような装飾品が出土する場合、多くは墓であると想定されるが、今回出土遺物の時期と周囲の出土遺構の内容、遺構の平面形から、弥生時代後期の不整形の土坑として報告した。勾玉およびガラス玉の素材は、科学分析によると特異なものであるとのことである。集落内になぜこのような遺構が造られたのか、その性格付けについては未だ詰め切れてはおらず、今後の課題とせざるを得ない。

以上、弥生時代中期～後期に集落が営まれた後、古墳時代に入ると、少なくとも今回の調査地点では遺構が見られなくなる。出土遺物の中に須恵器が見られない。狭い調査範囲の中だけのことであり、偶然の可能性もある。

さらに時代が下って遺構が確認されたのは、古代末～中世初頭であり、井戸が見つかっている。6次調査でも井戸の他、黒色土器椀や土師器皿を供献した土坑墓、道路の側溝かとみられる溝、多数のピットが検出されており、中世の屋敷地が一帯に広がっていたものとみられる。これらの中世の井戸群からは、中国の銅鏡や墨書き器も出土しており、屋敷地の住人は博多ともつながりのある階層の人々であったろうと想像される。

今回の調査により、各時期の遺構の移り変わりが次第に明確になってきた。今回は本社ビル改築に伴い、既存建物解体に先立って行ったごく一部の調査であり、新本社ビルの本体部分は別途13次調査として実施された。その成果報告は2019年度予定であり、今後はそれも併せて参照いただきたい。

山王遺跡 11 次調査出土玉類の保存科学的調査

比佐陽一郎（埋蔵文化財センター）

1.はじめに

山王遺跡 11 次調査で出土した玉類について、保存科学的調査を行った。埋蔵文化財を適切に保存、活用するために行われる保存処理においては、事前調査として肉眼観察を基本とした上で、各種の理化学機器を用いた調査が行われる。ここでは資料の状態に関する情報とともに、資料の来歴に関わる情報が得られることも多い。この様な調査をここでは保存科学的調査として位置づける。

2. 対象資料と調査の目的

調査対象とした玉類は 1 区の土坑 SK05（弥生後期）から出土した石製の勾玉 1 点と、ガラス製の小玉 14 点である。ガラス小玉は個体としては 15 点を計上しているが、内 1 点は玉の孔内部が剥離した小片のため、調査対象からは除外している。

石製勾玉は石材種、ガラス小玉はガラスの種類と製作技法の同定（推定）をそれぞれ目的とする。石製玉類の石材同定は、特に岩石・鉱物を専門としない人間が携わる場合に、肉眼観察のみでは誤認することも少なくなく、誤った同定（推定）は、資料の流通論など考古学的な研究に影響を及ぼしかねない。またガラスに関しては、近年、理化学機器を用いた材質分析や、製作技法の詳細な観察によって、幾つかの系統が存在し、産地や時代に特徴のあることが明らかにされている（肥塚ほか 2010）。

3. 調査の方法

石製勾玉は肉眼観察、みかけの比重測定、蛍光 X 線分析装置による含有元素の調査、X 線回折装置による結晶構造調査を行った。

ガラス小玉は、現状での重量測定、顕微鏡による製作技法調査、蛍光 X 線分析による含有元素の調査を行った。

蛍光 X 線分析は、試料に X 線を照射し、試料に含まれる元素から生じる各元素ごとに特有のエネルギー値を持つ二次 X 線＝蛍光 X 線を検出器で捉え、その元素の種類や量を調べる分析法である。

X 線回折分析は、試料に X 線を照射することで、試料を構成する結晶から得られる回折 X 線を検出器で捉え、ピークとして表すものである。ピークの同定は既知試料のデータベースと照合することで行う。

調査は福岡市埋蔵文化財センターの装置を使用した。各装置と分析条件等は次のとおり。

- ・実体顕微鏡（Leica・MZ-6）：倍率 6.3～40 倍
- ・デジタルマイクロスコープ（Hirox・KH-8700）：倍率 20～160 倍
- ・エネルギー分散型微少部用蛍光 X 線分析装置（AMETEK・EDAX Orbis）：対陰極：ロジウム（Rh）／検出器：シリコンドリフト検出器／印加電圧：20kV・電流値：1000 μA／測定雰囲気：真空／測定範囲 0.3mm φ／測定時間 120 秒
- ・X 線回折分析装置（Bruker-AXS・D8-DISCOVER）：対陰極：銅（Cu）／検出器：リアルタイム二次元検出器／印加電圧：40kV・電流値：40 μA／測定角度 13～77°／測定範囲 0.3mm φ／測定時間 900 秒

4. 調査結果

石製勾玉は全体に非常に淡い青緑色を呈する。微細な文様状の変化は見られるものの、全体に均質である。重量は3.90g、水中重量（＝体積）は1.55g、結果、みかけの比重は2.54であった。古代の玉に用いられる石材はヒスイ輝石（いわゆる硬玉）に代表される緑色のものが多いが、ヒスイ輝石の比重は3～3.3とされており、この時点で候補からは除外される。

次に蛍光X線分析では、ケイ素(Si)が最も強く検出され、次いで鉄(Fe)、マグネシウム(Mg)、ニッケル(Ni)が明瞭なピークとして認められる。他にクロム(Cr)、アルミニウム(Al)は微弱ながらピークが見られる。また、X線回折分析では、検出されたピークがAntigolite（アンチゴライト）＝蛇紋石のものと完全に一致した（図-1）。

次にガラス小玉であるが、個体として識別した15点はすべて白色、あるいは乳白色を呈している。これは経験上、鉛ケイ酸塩ガラスに特徴的な外観となっている。顕微鏡観察では一部の資料の破断面で風化を免れた部分が現れており、やや濃いめの緑色を呈している。本来は緑色の色調であったことが窺える。また、孔を取り巻くように風化で生じた凹凸が回っている状況が看取できる個体も多く、心棒に溶けたガラスを巻き付けて製作されたと考えられる。

蛍光X線分析では、鉛やケイ素の強いピークが検出される他、微弱なピークとしてアルミニウム、カルシウム、鉄、銅(Cu)などが見られる。先行研究によれば、弥生時代の鉛ケイ酸塩ガラスには鉛ガラスと鉛バリウムガラスがあるとされており、鉛バリウムガラスの場合、風化が著しい資料でもバリウム(Ba)はピークとして明瞭に検出される。今回の資料ではすべてバリウムは検出されておらず、鉛ガラスであると考えられる。また、本来はガラスの主成分はケイ素であり、これが最も強いピークとして検出されるべきであるが（図-2）、今回の場合、大半の資料鉛がケイ素を上回る結果となっている（図-3）。見た目の状態と合わせて、風化が相当に進んでいる事を示すものと考えられる。

5.まとめ

福岡市では蛍光X線分析装置が導入された平成11年以降、当時奈良文化財研究所でガラスの分析調査を行っていた肥塙隆保氏の指導を受けながら、市内出土資料を中心とするガラス製品の調査を行ってきた。しかし、これまで調査を行った弥生時代のガラスの多くはアルカリケイ酸塩系のガラスで、鉛ケイ酸塩系のガラスが存在する場合も鉛バリウムガラスであった。元岡・桑原52次調査では、弥生時代中期後半～後期後半とみられる資料の中に、1点鉛ガラスの小玉を確認している（比佐ほか2018）。しかし、鉛ガラスが10点以上まとめて確認された事例は初めてである。

また石製の勾玉は蛇紋石を主体とする石材であり、蛇紋岩であると考えられる。しかし、蛇紋岩は滑石の母岩となるもので、X線回折で蛇紋石が大部分であっても「肉眼鑑定では混乱を招かないためこの種の資料も敢えて滑石としていることが多い」ともされている（五十嵐2006）。確かに資料の外観は一般的な蛇紋岩の緑色とは異なっており、見た目だけでは滑石と同定しても違和感はない。

蛇紋岩とした場合、近隣では市内の西新町遺跡で古墳時代前期の玉作工房と見られる住居から、勾玉未製品が出土している。これについて江野道和氏は蛇紋岩製としているが（江野2011）、報告書では製品が蛇紋岩製、未製品は凝灰質泥岩と分けて記載されている（重藤2000）。糸島市の潤地頭給遺跡でも弥生終末～古墳初頭の玉作工房に蛇紋岩（滑石）の勾玉未製品があるとされる（江野2011）。今回の資料とは時期が若干異なるものの、今後、勾玉石材の比較等によって、生産と消費の関係が見えてくる可能性も考えられよう。

【参考文献】

- 五十嵐俊雄 2006 「考古資料の岩石学」パリノ・サーヴェイ株式会社
 江野道と 2011 「伊都国の大作跡～渾地頭給跡を中心に」「魏志倭人伝の末廬國・伊都國－王（墓）と翡翠玉－」日本玉文化研究会北部九州地方大会実行委員会
 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその変遷」『月刊文化財』566号 第一法規
 重藤輝行（編）2000 「西新町遺跡II - 福岡県福岡市早良区西新町遺跡第12次調査報告1-」福岡県文化財調査報告書第154集 福岡県教育委員会
 比佐陽一郎・松岡菜穂 2018 「元岡・桑原42・52次調査出土ガラス小玉の保存科学的調査」『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 元岡・桑原遺跡群29 - 第42次(5)・52次調査の報告-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1354集 福岡市教育委員会

表-1.山王11次ガラス玉観察・分析所見

No.	挿図番号	資料名	色調	観察所見	想定される製作技	分析所見	ガラスの種別
1	8-18	小玉	不明	表面の一部欠損。製作技法にかかる痕跡は見られない。	巻き付け？	◎Si／●Pb／○Al／△Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
2	8-19	小玉	不明	表面一部剥離。側面に外形に沿って巡る触像が見られる。	巻き付け	○Pb／●Si／△Al, Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
3	8-20	小玉	不明	表面大半剥離。製作技法にかかる痕跡は見られない。	巻き付け？	○Pb／●Si／○Al／△Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
4	8-21	小玉	不明	表面の一部欠損、表面剥離。腐食により生じた段が外形に沿って巡る部分がある。	巻き付け	○Pb／●Si／△Al, Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
5	8-22	小玉	不明	表面の一部欠損、表面剥離。腐食により生じた段が孔の外形に沿って巡る部分がある。	巻き付け	○Pb／●Si／○Al／△Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
6	8-23	小玉	不明	一部欠失、表面剥離。側面に外形に沿って巡る触像が見られる。	巻き付け	○Pb／○Al, Si／△Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
7	8-24	小玉	緑	2片接合、破断面中心部には本来の綠色が残る。腐食により生じた段が外形に沿って巡る部分がある。	巻き付け	○Pb／●Si／△Al, Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
8	8-25	小玉	不明	半欠、表面剥離。製作技法にかかる痕跡は見られない。	巻き付け？	○Pb／○Si／△Al, Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
9	8-26	小玉	緑	2/3欠、表面剥離、中心部は健全な層が残る。製作技法にかかる痕跡は見られない。	巻き付け？	○Pb／●Si／△Al, Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
10	8-27	小玉	緑	半欠、表面剥離、表層のみ風化、内部は健全。腐食により生じた段が孔の外形に沿って巡る部分がある。	巻き付け	○Pb／●Si／△Al, Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
11	8-28	小玉	緑	半欠、表面剥離、表層のみ風化、内部は健全。側面に外形に沿って巡る触像が明瞭に見られる。	巻き付け	○Pb／●Si／△Al, Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
12	8-29	小玉	緑	2/3欠、表面剥離、中心部は健全な層が残る。側面に外形に沿って巡る触像が見られる。	巻き付け	○Pb／●Si／△Al, Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
13	8-30	小玉	緑	2/3欠、表面剥離、中心部は健全な層が残る。孔の内面に孔の外形に沿って横方向の触像が巡る。	巻き付け	○Pb／○Si／△Al, Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
14	8-31	小玉	緑	2/3欠、表面剥離、中心部は僅かに健全な層が残る。孔の内面に孔の外形に沿って横方向の触像が巡る。	巻き付け	○Pb／●Si／△Al, Ca, Fe, Cu	鉛ガラス
15		小玉	不明	孔周辺の剥離片か	巻き付け？未調査		—

◎主要元素

●主要元素に次ぐもの

○ピークとして明瞭に確認できるもの

△ピークが微弱なもの

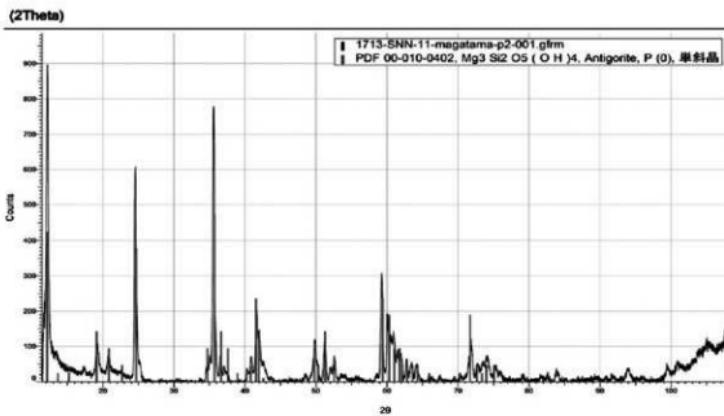


図-1.石製勾玉のX線回折分析結果

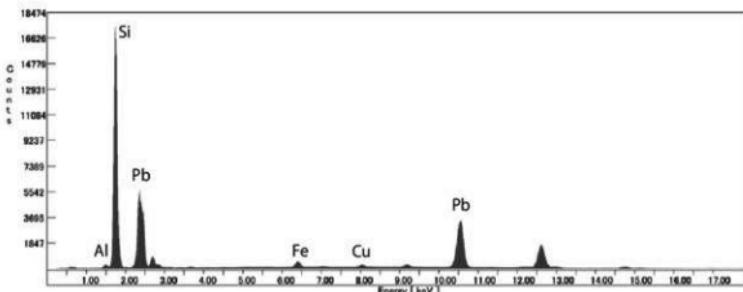


図-2.ガラス玉(資料No.01)の蛍光X線分析結果

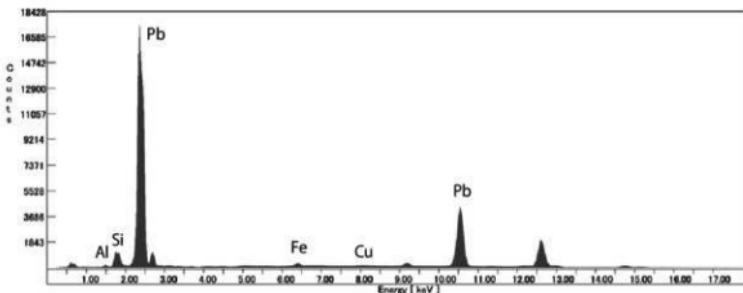
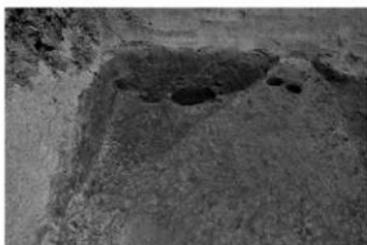


図-3.ガラス玉(資料No.06)の蛍光X線分析結果

図版 1



1区東半全景（南東から）



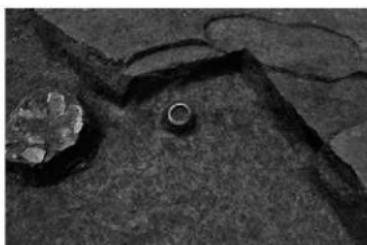
S C O 1 (南西から)



S C O 2 (南西から)



S P O 6 壺出土状況（南から）



S C O 2 壺出土状況（北から）

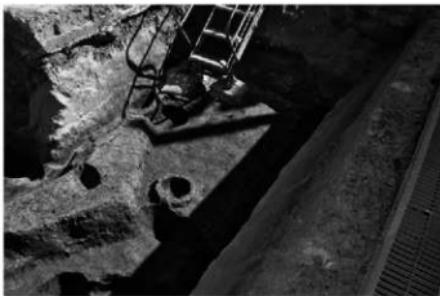
図版2



1区西半全景（北東から）



S C O 6 (東から)

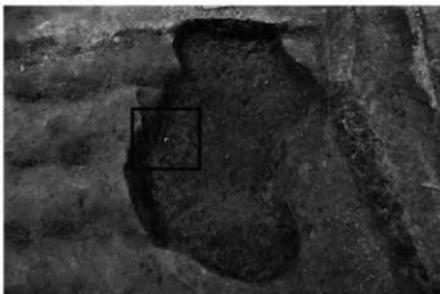


S C O 8 (北から)

図版3



SK 05 (北西から)



SK 05 勾玉出土状況 (南西から)



SK 05 勾玉出土状況拡大

図版4



2区全景（南西から）

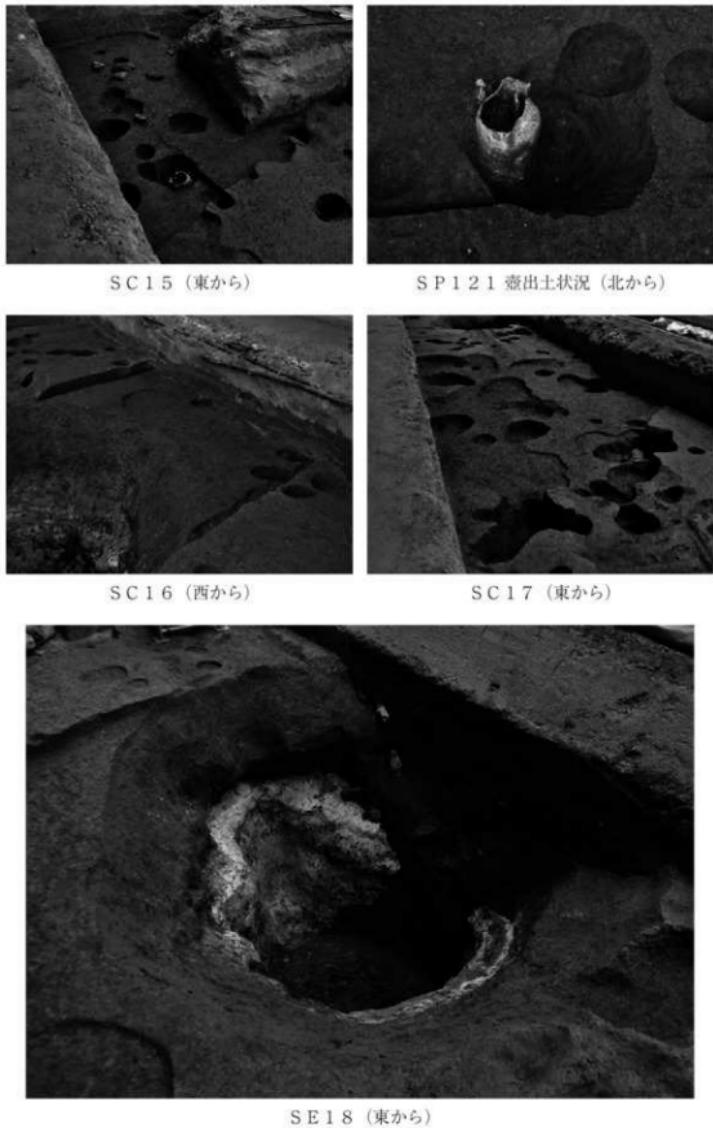


S C 0 8 (東から)



S K 1 4 (南から)

図版5



図版6



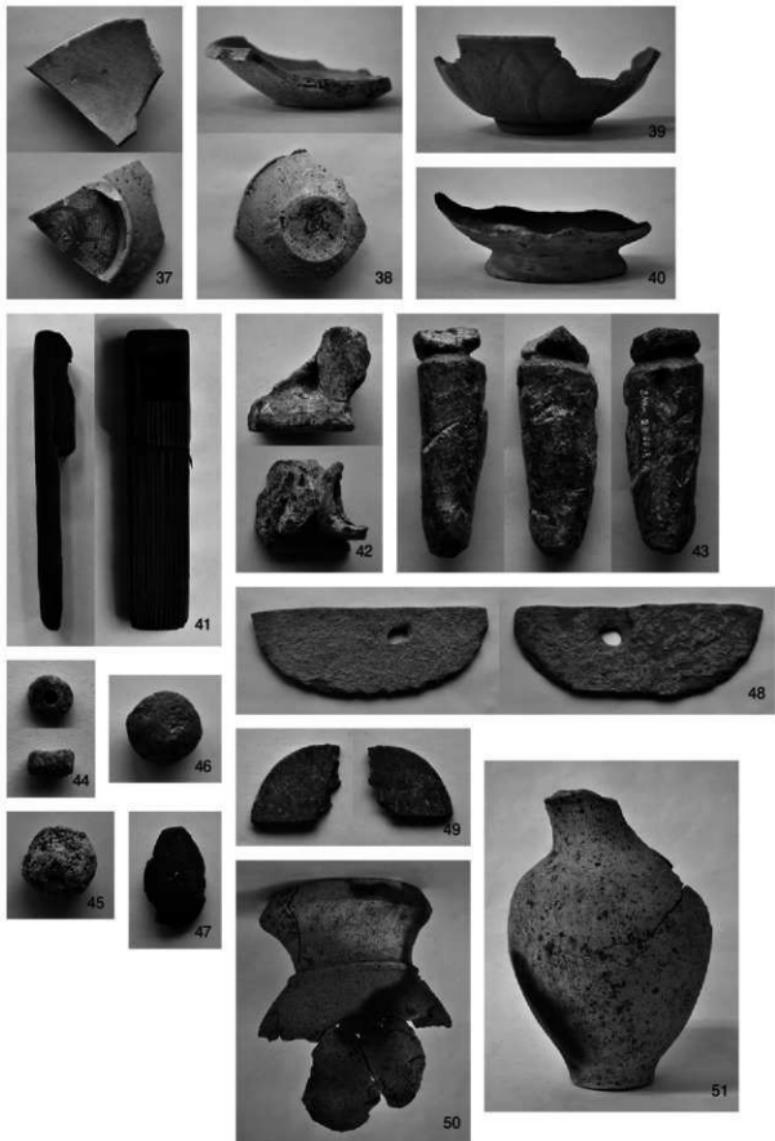
出土遺物 1

図版7



出土遺物 2

図版8



出土遺物 3

報告書抄録

ふりがな	さんのういせき							
書名	山王遺跡9							
副書名	山王遺跡第11次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第1361集							
編著者名	木下博文							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2019年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
さんのういせき 山王遺跡 第11次	ふくおかしきはかたこまちのう 福岡市博多区山王 2丁目3-5 30-1, 30-2	40132	2379	33度 34分 52秒	130度 26分 5秒	20170711 ～ 20170921	287	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山王遺跡	集落跡	弥生～中世	竪穴建物、井戸、 土坑、柱穴	弥生土器、青銅器、 玉、黒曜石、中国 製陶磁器、土師器、 須恵器				
要約	山王遺跡は御笠川と那珂川に挟まれた標高6mの中位段丘上に立地する集落遺跡である。今回の調査地点は遺跡の東部に当たり、弥生前期の墓群を検出した6次調査地点とは、道路を挟んで南東側に接する。今回は弥生時代中期～後期の竪穴建物7棟、平安時代末期～鎌倉時代前期の井戸1基、柱穴多数を検出した。							

山王遺跡9

- 山王遺跡第11次調査報告 -
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1361集

2019(平成31)年3月25日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社 九州カスタム印刷
〒812-0007 福岡市博多区東比恵3-16-15

